

織 維部門の猛烈営業マンとして知られ、イタリアの高級ブランド「アルマーニ」の輸入販売権獲得など、伊藤忠のブランドビジネスの礎を築いた。会議や書類は大嫌いな、超現場主義社長の「読書論」とは。

「書を捨てて現場に出ろ」というイメージがある岡藤社長に、あえて読書論について伺います。

私はいわゆる「読書家」ではない。特に社長になってからは目を通さなくてはいけない書類が山のようにある。とてもじゃないがたくさんの本を読んでる時間がない。

その代わり「トップポイント」という新刊本10冊を要約する月刊誌をここ3、4年購読している。要約を読んで、面白そうな本があれば買って読むようにしている。

最近読んだ本はありますか。

元防衛事務次官の守屋武昌氏の「普天間」交渉秘録。これは知人が送ってきてくれた。誰しも自分に都合のよいことしか書かないから、この本も守屋氏側から見たストーリーでしかないかもしれないが、沖縄問題の難しさ、政治家の利権など、世間一般とは違う角度からの見方が非常に面白かった。

それ以外では、ビジネスに直結した本が多い。消費者関連の商売が良かったのでマーケティングの本が好

きやね。「トップポイント」でも、マーケティングについて書かれている部分を何度も読んでマーカーを引いている。顧客サービスとしてチョコレートを渡すレストランが、最初に二つチョコを渡して、後からもう一つ追加して渡すと喜ばれる、といったちょっとしたヒントがある。海外出張はいわゆる至福のひとつ

きですわ。飛行機に乗って、ちょっとお酒を飲んで本を読む。そういうときは小説がほとんど。細切れの時間が多いため短編がいい。若い頃からあまり読書はされなかったのですか。子供の頃に世界文学全集や日本文学全集をそろえていて、特に高校時代に片っ端から読破していた。高校

2年のときにロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』全10巻を読んだりもした。まあ、暗い小説という程度で細かい内容は覚えてないやけど。ベートーベンをモデルにした作曲家が批評家や派閥の中で苦勞する話。どんなときでも自分の信念を守ることに感銘を受けた。覚えていらっしやいますね。

INTERVIEW
超現場主義社長の読書論

岡藤正広

伊藤忠商事社長

おかふじ・まさひろ ● 1949年生まれ。74年に東京大学経済学部を卒業し伊藤忠商事に入社。一貫して織維部門のトップから2010年に社長就任。



読書は要約で厳選 本は若いうちに読め

当時使っていた英語の参考書の裏表紙に「心情においてのみ偉大であった人を英雄と呼びたい」というジャン・クリストフの一節を書いていた。その参考書はポロポロになるまで使った。当時は純粋で理想に燃えていたし、活字に飢えていた。若か

ったので「誰も読まないような長い小説を読む」ことになってい。た。その一節を参考書に書く。かっこいいじゃないですか。でも、本来の自分ではなかった。

『蒼き狼』に燃えて 総合商社を目指す

—— 本当の自分に近い本はあったのですか？

高校3年のときに読んだ井上靖の『蒼き狼』。後に映画化されたが、当時はそれほど有名ではなかった。チングス・ハーンをモデルにした生い立ちもわからない人物が、あれだけの帝国を作った。それを読んで燃えましてね。それから井上靖の西域ものを読破した。商社を目指すことになる僕には、「ジャン・クリストフ」よりは『蒼き狼』が合っていた。

—— 猛烈営業マンだった若い時代に本を読まなくなったのですか？

30代、40代はたくさん読みましたね。まあ、推理小説が多かったな。一時期は、海外出張のときには松本清張ばかり読んでいた。基本的には僕は暗いのかな(笑)。本当は元気が出るような本を読まないと。当時は新幹線に乗ったら必ず本を読んでいた。車内で寝てるやつはダメなやつや、と軽蔑していた。今は僕もすぐ眠くなるけど。

—— 若い頃に読んだ本を読み返されることはありますか？

読むこともあるが、何か違うなど失望することが多い。昔あこがれた異性に会わないほうがいいのと同じ。学生時代は純真で感受性に富んでいて、知識に対して貪欲だった。今はスレたんでしょう。何か寂しいけどね。感動しなくなってくる。会社でおカネ儲けて、よい決算書を読むほうが感動する。こんなこと言うとイメージ悪くなるけど(笑)。



毎月10冊の新刊本を要約した「トップポイント」で主要な本をチェック。気になった本のみを買って読むことで、読書効率を上げる